

広島大学霞キャンパス出土の「広大病院」食器

石丸恵利子・大近美穂・西口祐子

1. はじめに

広島大学医学部など医療系3学部と大学院および大学病院などがある霞キャンパス一帯（広島市南区霞1-2-3）は、江戸時代以降の新開地で、かつて水田などの農地として利用されていた。1907（明治40）年頃から、陸軍施設であった広島陸軍兵器支廠の比治山兵器庫の用地として埋め立てや盛土造成工事などの整備が行われ、その上に建物建設が開始された。兵器支廠の敷地は、事務所区と兵器庫区、火薬庫区に分かれ、現在の霞キャンパスは、事務所区と兵器庫区があった区画に相当し、火薬庫区は現在の中国管区警察学校と段原中学校の敷地とほぼ一致する。当時、火薬庫を取り囲んでいた土塁の一部は、今も霞キャンパスと警察学校の間でその姿を見ることができる。

兵器支廠（1940：昭和15年に兵器補給廠に改称）に建てられた兵器庫や未填薬弾丸庫などのレンガ造り建物は、1945（昭和20）年の原爆による倒壊や火災を免れ、戦後も県庁や国税局などの国の機関として利用された。その後、1957（昭和32）年に広島大学医学部と附属病院が霞キャンパスへの移転を完了し、平成11年までに、順次レンガ造り建物は取り壊された。現在では、外観の一部に当時の煉瓦や石材を用いて復元されたレンガ造り建物が、医学資料館として利用されているだけである。

広島大学霞キャンパスにおける考古学的な調査は、開発に伴う埋蔵文化財の取扱いについて各自自治体との協議に基づき、2006年から広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門が実施している。その後の立会や試掘調査において、「広大病院」と銘のある磁器製食器が多数出土している。本稿では、「広大病院」食器の器種や印判の特徴、聞き取り情報などから、昭和期における大学病院食器の流通や利用の様相について考察する。

2. 霞キャンパスの「広大病院」食器出土調査地点

本稿で扱う資料は、霞キャンパスの複数の調査地点から出土したものである。調査地点は、現在の霞キャンパス配置図（第20図）と医学部および附属病院の昭和

32年移転当初のキャンパス利用状況図（第21図）の両者にその位置を示した。以下、各地点の調査概要を述べる。

KA0710調査は、「大学病院環境整備工事（植栽移設ほか）」に伴う立会調査で、樹木の新植および移植のための掘削である。キャンパスの南東隅にあたる総合研究棟の南側通路の緑地帯にあるクスノキ抜き取りに伴う掘削箇所6ヶ所において、それぞれ径2～3mの範囲を深さ1mまで掘削した。同時に検出された石垣状遺構（溝）の埋土やその周辺から、「広大病院」の印判がつけられた食器が多数出土した。昭和32年当時は、調理室や看護学校等として使用されていた15号館の南側にあたる。

KA0806調査は、「大学病院外来診療棟南側ガス管改修工事」に伴う立会調査で、たんぼぼ保育園と原爆放射線医科学研究所の南側通路の緑地帯に、ガス管を新設するための掘削である。約140mにわたる範囲を、幅約1m、深さ約0.5mまで掘削し、その地点で検出された溝の掘方から「広大病院」食器が出土している。昭和32年当時は、財務局倉庫として使用されていた16号館と15号館の南側にあたる。ただし、16号館は、昭和11年作成の「広島陸軍兵器支廠構内要図」には記されておらず、それ以降昭和32年までに建設された建物だといえる。

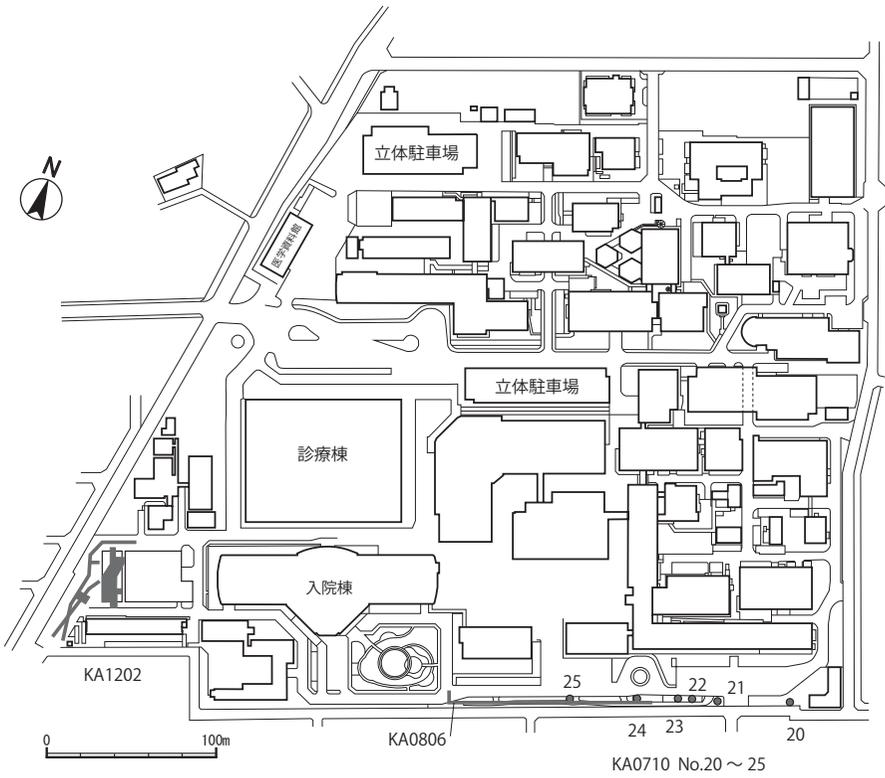
KA1202調査は、「広島大学霞地区エネルギーセンター増設工事ほか（建物・電気・雨水）」に伴う試掘・立会調査で、建物増設箇所検出された石垣遺構やコンクリート床面の上層および雨水排水管敷設の掘削埋土などから「広大病院」食器が出土した。昭和32年作成のキャンパス利用状況図を見ると、本調査地点は、国税局が使用していた11号館の南西部で、敷地の南西隅に相当し、11号館の周辺には教育学部の宿舍などの複数の建物があったことが分かる。

MI1201調査は、広島市南区翠1-1-1に所在する広島大学附属中・高等学校におけるバレーコート整備工事（「広島大学（翠）中・高バレーコート整備工事」）に伴う立会調査である。MI1201調査地点から出土した資料は、「広大病院」食器ではない可能性もあるが、霞キャンパスでも類似したものが出土しており、参考資料として一部取り上げた。

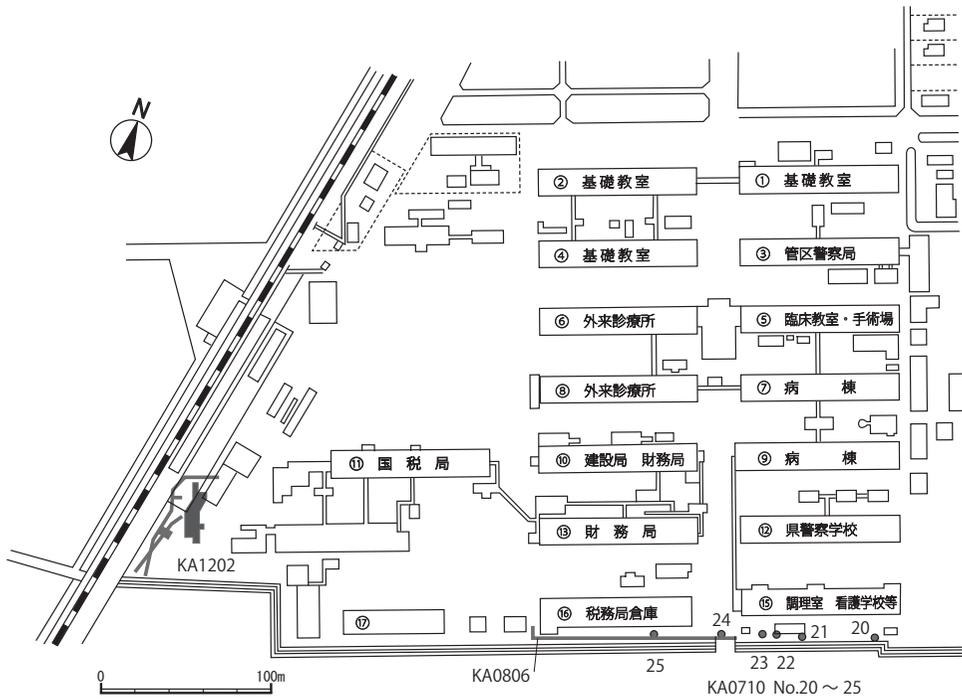
3. 出土遺物の特徴

(1) 「広大病院」食器の器種概要

「広大病院」食器は、側面や見込み部に青色、桃色、緑色で「広大病院」と記された磁器製の食器類である。口縁の内側面もしくは外側面に、一重線あるいは二重線



第 20 図 広島大学霞キャンパス現配置と調査地点の位置



第 21 図 広島大学移転当初の霞キャンパス利用状況と調査地点の位置

が銘と同色で巡らされており、高台内に、「MINO」と緑色釉で裏印が押されているのが大きな特徴である。胎土は白色で、畳付以外の全体に透明釉がかけられている。

器種は、碗（碗Ⅰ：第22図1～4・7）、碗の蓋で摘みのある碗蓋（蓋Ⅰ：第23図8～12）、口唇部が五弁の花形をした鉢（鉢Ⅰ：第24図14～17）、胴部が直線的に広がり、口縁部外側に段をもつ鉢（鉢Ⅱ：第24図18～20）、底部が広く、胴部がほぼまっすぐに立ち上がる鉢（鉢Ⅲ：第25図21・22）、蓋Ⅰよりもやや小ぶりで摘みのある蓋（蓋Ⅱ：第25図24・25）、内側に返しのある蓋（蓋Ⅲ：第25図26）、筒状の湯呑碗（湯呑Ⅰ：第25図27）、径約17cmの皿（皿Ⅰ：第26図30～32）、径5.4cm前後の小皿（第27図34・36～38）を確認することができた。

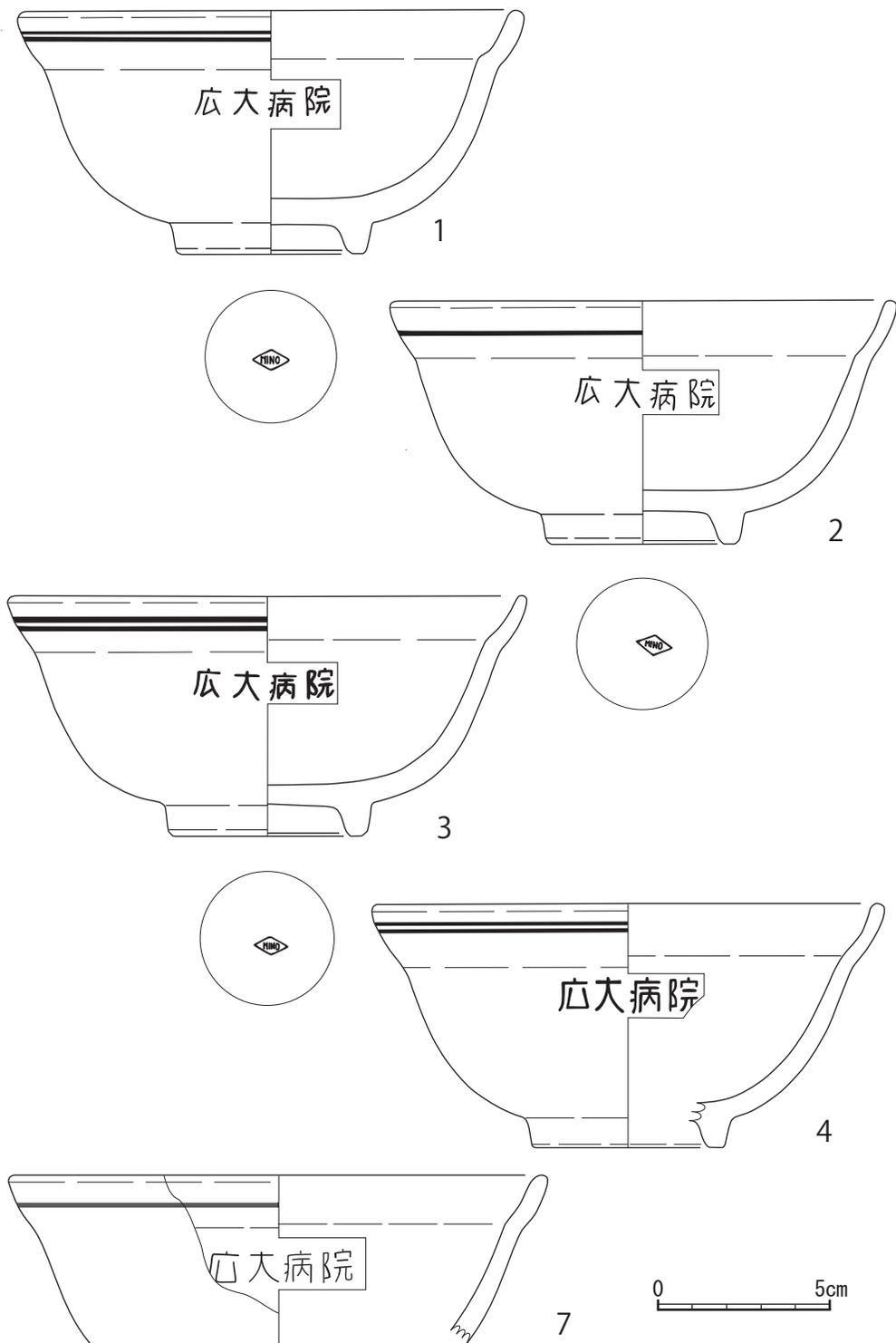
また、広大病院などの銘は確認できないが、同一の裏印がある径約15cmの皿（皿Ⅱ：第26図33）や、口縁に二重線を巡らせた小型の丸い湯呑碗（湯呑Ⅱ：第25図28）、碗Ⅰよりも小ぶりの碗（碗Ⅱ：第25図29）も確認することができた。以下、器種分類ごとにその特徴を述べる。

(2) 器種ごとの特徴

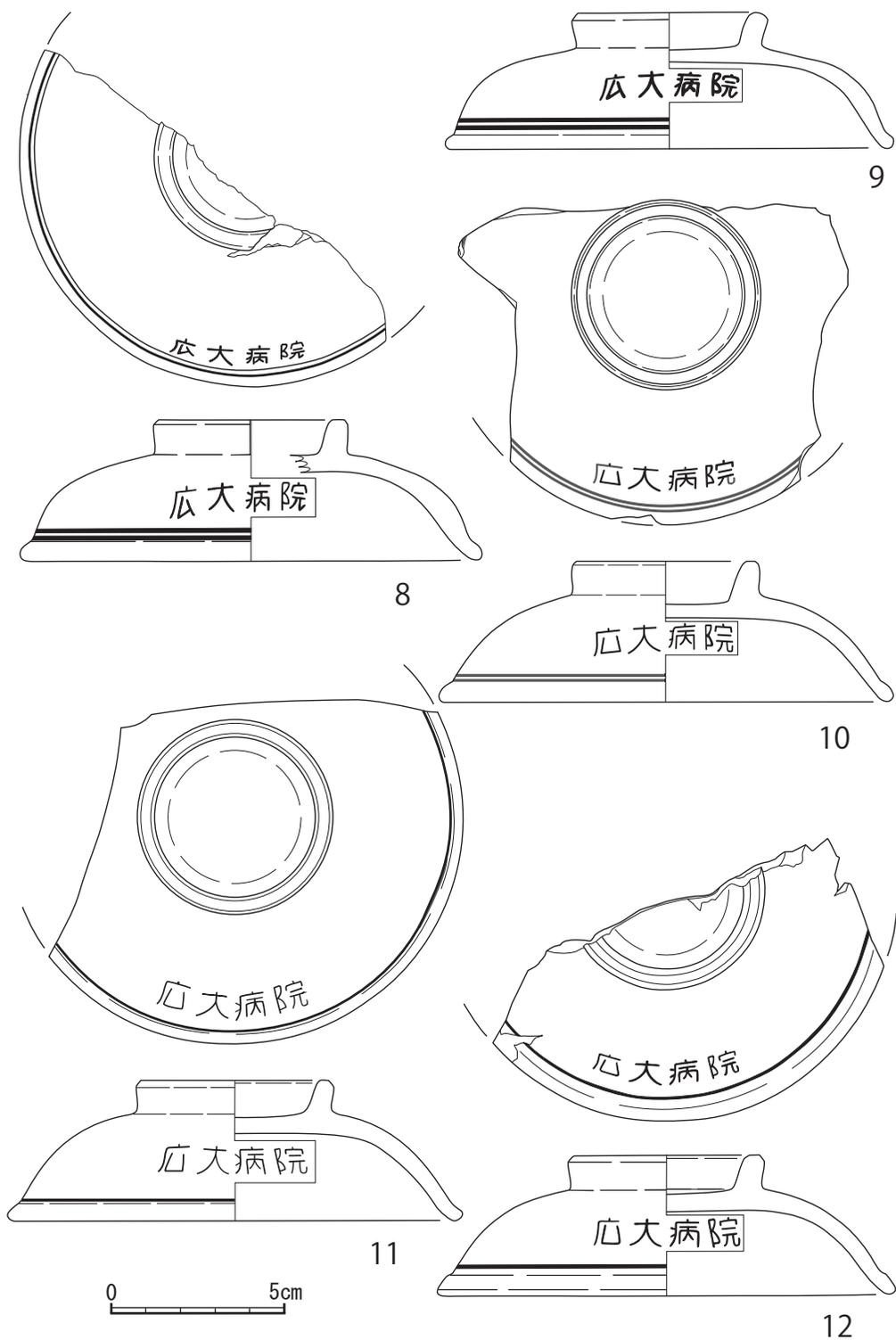
碗Ⅰは、いわゆるどんぶり碗で、破片数にして201点の資料を確認した⁽¹⁾。口径14.5～15.5cm、底径5.2～5.9cm、器高6.8～7.1cmの範囲で大きさにややばらつきがあるものの、同一規格で製作されたものと考えられる。口縁下約1.5cmの部分には、蓋を受けるための段がつけられており、蓋とセットで使用されたものであろう。胴部の外側面には、それぞれ青色・桃色・緑色で「広大病院」の銘が押され、その上部には、同色で一重線あるいは二重線が全周に巡らされている。青色と緑色の碗には二重線、桃色の碗は一重線が描かれている。高台内中央には、緑色で「MINO」の意匠（裏印・窯印）が確認できる。

蓋Ⅰは、碗Ⅰとセットになる碗蓋である。破片数にして245点の資料を確認した。口径12.8～13.3cm、摘み径5.2～5.6cm、器高3.8～4.1cmを計り、碗Ⅰ同様に同一規格で製作されていると考えられる。口唇部はやや膨らみを呈するもので、胴部外側面に、それぞれ青色・桃色・緑色で「広大病院」の銘が認められる。その上部には、同色で一重線あるいは二重線が全周に巡らされているが、碗Ⅰ同様に、青色と緑色は二重線、桃色は一重線が描かれているのが特徴である。

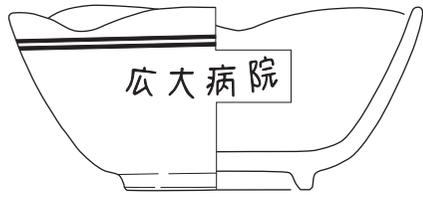
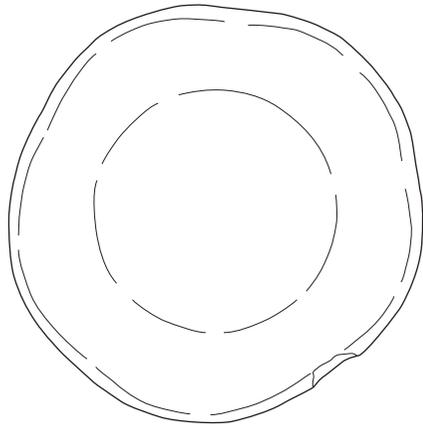
鉢Ⅰは、口唇部が5弁の花形をした鉢である。破片数にして、59点を数える。口径は11.0～11.1cm、底径4.9～5.5cm、器高4.3～5.0cmを計る。口唇部の花形弁



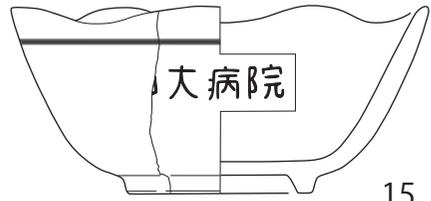
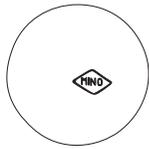
第22図 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器実測図(1)



第23図 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器実測図(2)



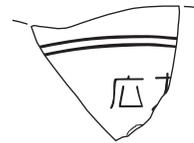
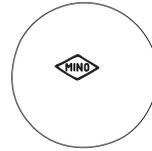
14



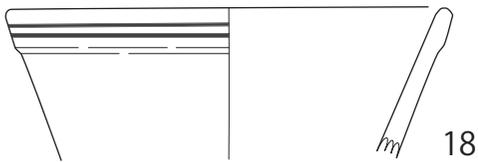
15



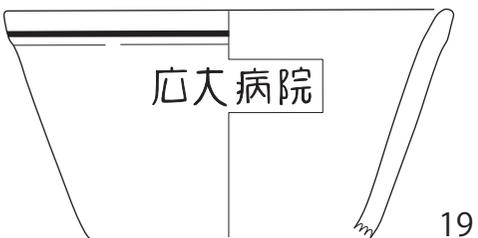
16



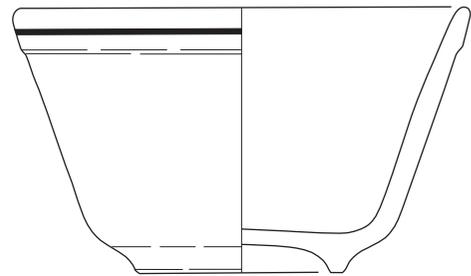
17



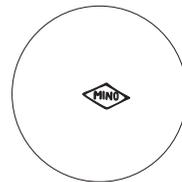
18



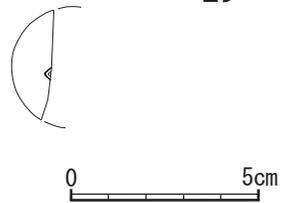
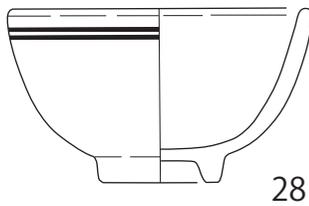
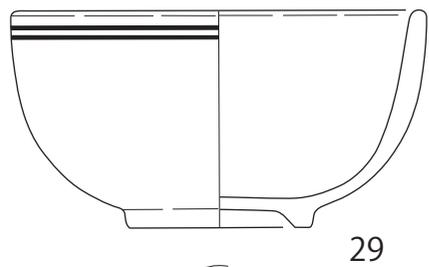
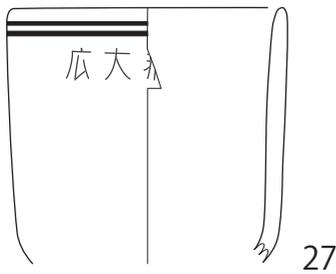
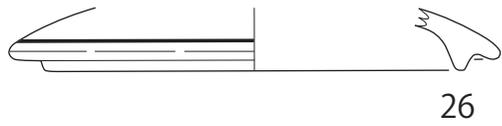
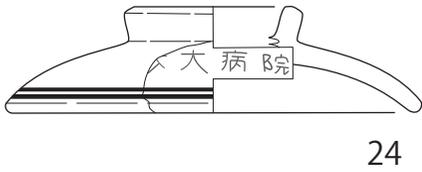
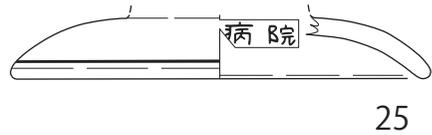
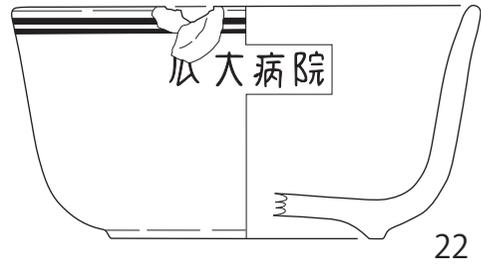
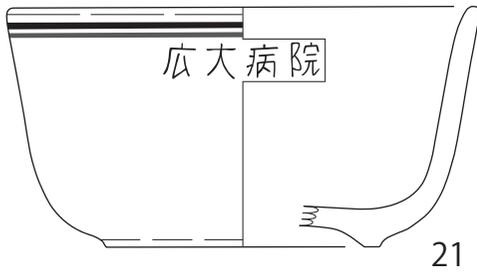
19



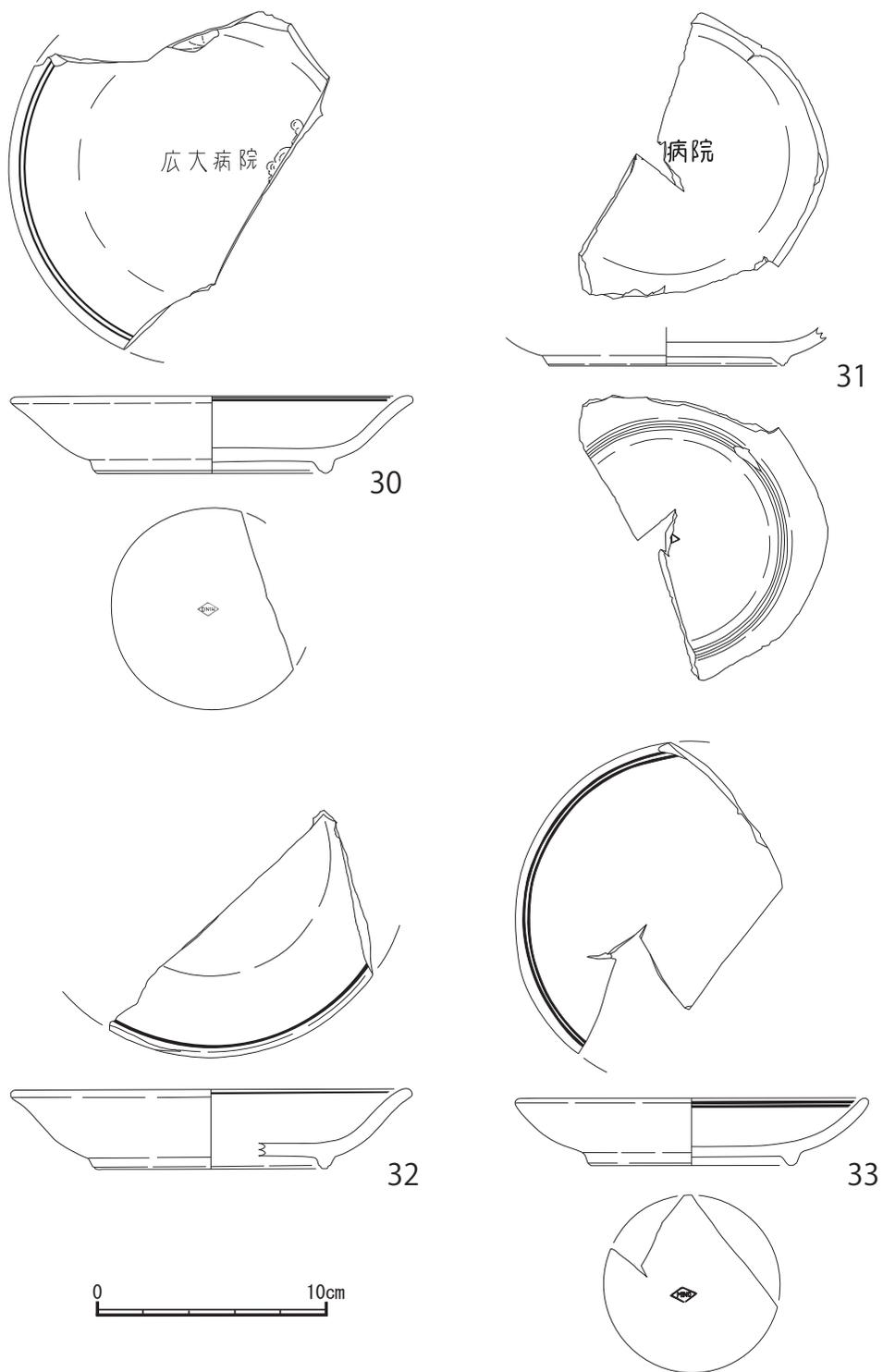
20



第 24 図 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器実測図 (3)



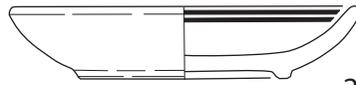
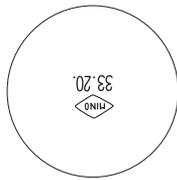
第 25 図 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器実測図 (4)



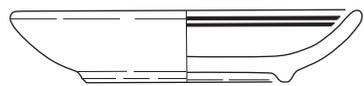
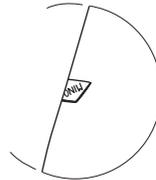
第26図 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器実測図(5)



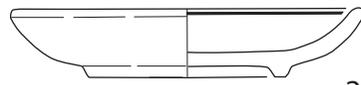
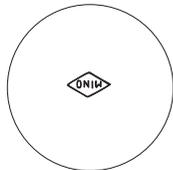
34



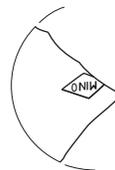
36



37



38



第 27 図 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器実測図 (6)

は5つがすべて同じ高さではないため、計測場所によって器高にはばらつきが認められる。外側面にそれぞれ青色と桃色で「廣大病院」と銘が押され、銘の上部には、同色で一重線あるいは二重線が描かれている。基本的には青色が二重線、桃色が一重線であるが、1点のみ桃色で二重線のものが確認された(第24図17)。高台内には、緑色で「MINO」の意匠が確認できる。

鉢Ⅱは、胴部が直線的に広がり、口縁部外側に段があるもので、44点の資料を確認した。口径11.8～12.2cm、底径5.3～5.4cm、器高7cmである。碗Ⅰ同様に、胴部外側面に、桃色で「廣大病院」の印がつけられた資料のみ確認された。段部分の外側面には、いずれも桃色で一重線が全周に巡っている。文字は不明であるが、破片形態から鉢Ⅱと判断できるものの中に、青色で二重線が引かれたものを1点のみ確認することができた(第24図18)。高台内中央には、緑色で「MINO」の意匠が付けられている。

鉢Ⅲは、底部が鉢Ⅱよりも広く、胴部がほぼ垂直に立ち上がる鉢である。20点の破片資料を確認した。口径12.4～12.5cm、底径7.1～7.2cm、器高6.1～6.4cmを計り、胴部やや上寄りの外側面に青色で「廣大病院」の銘が認められる。文字の上方には、同色で二重線が全周に巡らされている。桃色や緑色のものは確認できなかった。高台内の中央には、緑色で「MINO」の意匠が付けられている。

蓋Ⅱは、蓋Ⅰよりも小型のもので口径11.0～11.2cm、摘み径4.0～4.6cm、器高2.6～2.8cmを計る。青色2点、桃色1点の計3点を確認することができた。蓋Ⅰ同様に青色と桃色で「廣大病院」の銘がつけられ、青色のものは口縁外側面に二重線、桃色のものは一重線が巡らされている。対応する身については不明であるが、大きさから鉢Ⅲの蓋として使用できる可能性がある。

蓋Ⅲは、口縁部内側に返しがついた蓋で、口縁部外側面に桃色で一重線が巡らされたものが1点のみ確認された。破片のため摘み付きかどうは不明であるが、口径は13.0cmに復元される。対応する身の器種は不明である。

碗Ⅱに分類したのは、口径11.0～11.2cm、底径4.8cm程度、器高5.0～5.7cmで、碗Ⅰよりも小ぶりの碗で、4点確認された。蓋を受けるような段はつけられておらず、胴部は緩やかなカーブを描いて立ち上がるものである。いずれも外側面口縁に緑色釉で二重線が巡り、高台内に「MINO」の意匠がつけられている。それらのうち、二重線の下方に、丸で囲まれた「前垣内」の意匠がつけられたものが2点確認された。

湯呑Ⅰは、底部からほぼまっすぐに胴部が立ち上がるもので、口径7.0cmである。

底部が欠損しているため、底径と器高および裏印の有無は不明である。外面口縁に青色と緑色で二重線が描かれているものがあり、青色のものは二重線下方に「広大病院」の銘が確認できるが、緑色の二重線が巡るものには「広大病院」の銘は確認できていない。

湯呑Ⅱは、口径8.0～8.5cm、底径2.9～3.1cm、器高8.0～8.5cmで、底部からやや丸みをもって外に広がる低めの湯呑である。外面口縁には緑色で二重線が巡らされている。底面には裏印は押されていないため、病院食器と同じ生産者であるかは不明である。広島大学附属中・高等学校のある翠地区で複数点出土している。

皿Ⅰは、口径17.3～17.4cm、底径10.0～10.2cm、器高3.2～3.4cmに復元できるのもので、破片数55点を確認した。内面の見込み中央の平坦面に、青色と桃色でそれぞれ「広大病院」と銘が押されている。他の器種同様に、青色の釉薬が用いられたものは、口縁内面に二重線が、また桃色のものは一重線が巡らされている。高台内中央には、緑色で「MINO」の意匠が確認できる。

皿Ⅱは、口径15.2～15.4cm、底径8.8～9.4cm、器高2.7～3.0cmのもので、破片で26点を確認した。「広大病院」の銘は確認できないが、緑色で内側面口縁に二重線が巡らされている。二重線の下方には、碗Ⅱでも確認された「前垣内」の意匠がつけられた資料が1点のみ確認された。高台内には緑色で「MINO」意匠が確認できることから、「広大病院」食器と同じ生産元であることが分かる。

小皿は、口径9.3～9.5cm、底径5.2～5.6cm、器高1.7～2.0cmのもので、破片を含めて76点を数えた。皿Ⅰ同様に内面の見込み中央の平坦面に青色・桃色・緑色で「広大病院」の銘が押され、青色と緑色のものは内側面口縁に二重線が、また、桃色のものは一重線が巡っている。底面には、緑色で「MINO」の意匠が押されている。

(3)「広大病院」銘

「広大病院」と記された銘には、青色・桃色・緑色の3色があり、碗や鉢などの湾曲した外側面や皿の見込み中央部に押印されている。それらの文字は定型的事から、手書きではなく印判により繰り返し押されたものと考えられる。銅板転写をうかがわせる塗りは確認できないことや、食器類は量産されたものと推測されることから、ゴム印によって押されたと考えられる。押された位置については、各器種で多少の個体差があるため、手作業で行われたと推測される。また、表面は平滑であることから、施文は全体に釉薬をかける前に行われていることがわかる。ゴ

ム印が押された文字の凹みに釉薬が入り込んだため、表面に凹凸が生じた痕跡を複数の資料で確認することができた。

銘の色調は、前述の3色を基本とするが、青色については明るい青と藍色に近い深い青が認められ、緑色についても深緑とやや明るい緑色を確認することができる。桃色については、施文時のかすれなどによる濃淡はあるものの、統一された色調である。

また、記された文字の形態は大きく2つに分類できる。全体的に縦長な字体と、丸みを帯びた字体があり、前者をタイプA、後者をタイプBとした。両者の差は、「広」の「ム」の形状、「病」の「丙」のはねの描写、「院」の「完」のはねの描写が異なる点として挙げられる。タイプAは青色・桃色・緑色すべてで確認できるが、タイプBは青色と桃色のみで、緑色で描かれたものは確認できなかった。

資料が存在する碗I、蓋I・II、鉢I～III、皿Iと小皿の8器種で比較すると、タイプAは、全8器種で確認されるものの、碗Iと小皿で青色・桃色・緑色の3色が確認できるが、蓋Iは青色と緑色、蓋IIは青色と桃色、鉢Iと鉢IIIは青色のみ、鉢IIは桃色のみ、皿Iは青色のみであることが指摘できる。また、タイプBは、碗I、蓋I、鉢I・II、皿I、小皿の6器種で確認でき、鉢IIと皿Iは桃色のみであることを指摘することができる。

(4) 施文と釉薬

「広大病院」食器は、銘以外の施文として、口縁の内外側面に銘と同色で一重線もしくは二重線が巡っているのが特徴である。線と線のつなぎ目で、色の濃淡は確認されるが、ずれはほとんどなく、回転台を用いて回しながら描かれたと判断される。

外側面口縁に施文があるものは、碗・蓋・鉢・湯呑である。二重線が巡らされたものは、青色・桃色・緑色のいずれの色も確認できるが、桃色のものは文字タイプBの鉢Iが1点のみであった(第24図17)。大多数は青色と緑色で、文字タイプはAとBともに認められた。外面口縁に一重線が施されたものは桃色のみで、大多数が文字タイプBに分類され、タイプAは碗I(第22図2)と蓋II(第25図25)の各1点のみであった。

また、内側面口縁に施文があるものは皿類であるが、二重線が巡らされたものは青色と緑色のみで、文字タイプAが多くを占める。一重線が巡らされたものは、青色と桃色が確認できるが、圧倒的に桃色の文字タイプBが多くを占める特徴がうか

がえた。

なお、全体には透明釉がかけられているが、畳付部分のみは無釉である。「廣大病院」銘および口縁に描かれた一重もしくは二重線、後述する裏印のすべては、全体に透明釉をかける前につけられている。

(5) 裏印

高台内には、「MINO」の文字が菱形の枠で囲まれた緑色の意匠が押されている。現在も岐阜県瑞浪市に本社のある美濃窯業株式会社が用いた意匠である。生産にかかわる点については後述するが、美濃窯業によって製造されたものが、広島大学病院で使用されていたことが指摘できる。

意匠は緑色釉で付けられており、「廣大病院」の銘にも使用された緑色釉と同じものだと考えられる。意匠の位置は基本的に高台内中央であるが、右に寄ったものや傾いたものなども確認され、「廣大病院」銘と同様に手作業によって押されたものと考えられる。菱形が描かれた線幅の不均一な点や、線のとぎれ、色の濃淡などから、ゴム印によってつけられた可能性が高い。また、意匠の大きさには若干の差が認められ、菱形の縦横比が $0.6 \times 1.0\text{cm}$ のもの、 $0.6 \sim 0.7 \times 1.1 \sim 1.2\text{cm}$ に分けることができ、前者をタイプ①、後者をタイプ②とした。

裏印タイプ①を持つ資料は、「廣大病院」銘の文字の色は青色が最も多いものの、桃色と緑色のいずれの色も認められる。また、銘の文字タイプ A が資料の大半を占めていることも指摘できる。中には、何を意味しているのか不明であるが「MINO 30.20」と統制番号のような数値がつけられたものも 2 点確認できた。いずれも青色で文字タイプ A の小皿に押されている。

裏印タイプ②についても、銘の文字の色は各色認められ、青色と緑色については、文字タイプも A・B の両者が確認できる。その一方で、桃色については文字タイプ B に限られることも指摘できる。上記の点や、「MINO」の字形にも複数の描写が確認できることから、複数の判が存在したと考えられる。

4. 「廣大病院」食器の生産

「廣大病院」食器の底面には、「MINO」の文字が菱形で囲まれた意匠がつけられていることはこれまでも記したが、美濃窯業株式会社の歴史を記録した『美濃窯業社史』には、1934（昭和 9）年に制定された社旗と、1961（昭和 36）年に制定さ

れた社章が紹介されており、そこに裏印と同じ意匠を確認することができる（美濃窯業株式会社 2002）。また、1957（昭和 32）年に製作された飯茶碗の高台内には、藍色釉ではあるが、「広大病院」食器と同じ裏印を見ることができる。これらのことから、「広大病院」食器が、美濃窯業株式会社製であることは明確である。同じ意匠がつけられた磁器は、徳島大学の医学部キャンパスおよび大学病院からも出土が報告されている（三阪 2015）。

美濃窯業株式会社は、瑞浪耐火煉瓦合資会社（1916 年創業）の事業と資産を継承して、1918（大正 7）年に岐阜県瑞浪市に設立され、1919 年に陶磁器の製造を開始している。『美濃窯業社史』には、設立当初、1920（大正 9）年には片倉製糸紡績から集団給食用食器の受注を受けたことや、1925（大正 14）年には銅板印刷を導入したことも記録されている。太平洋戦争勃発のため一時生産を休止しているが、戦後いち早く陶磁器の生産を再開して戦後復興の柱とし、1949（昭和 24）年頃からは、工場や病院、デパートなどの集団給食用食器メーカーとして全国的に販売を拡大し、1958（昭和 33）年には自動ロクロや乾燥炉が新設されるなど、生産規模を拡大させたことがうかがえる。

また、『美濃窯業社史』には、「グリーン 2 線」の病院用 3 段重ね食器や指定マーク入り給食用食器の写真が掲載されており、戦中・戦後期に生産された磁器はグリーン 2 線が美濃窯業社の代表的な色調であったことが示唆される。なお、1955（昭和 30）年に生産された食堂用食器や中華食器に、藍色（青色よりも深い色調）と桃色釉がつけられた食器を確認することができ、昭和 30 年には「広大病院」食器と同じ磁器の生産が可能であったことがうかがえる。

5. 他大学における大学病院食器の出土状況

大学病院銘の入った食器は、これまで全国のいくつかの他大学キャンパスの発掘調査において出土が報告されている。以下、その一部について概要を述べる。

九州大学では、福岡市東区に所在する病院キャンパスにおいて、碗や蓋、皿、小鉢などの磁器が出土している（九州大学総合研究博物館 2014）。碗の側面や蓋の上には「大學」と「醫院」の文字が合わさった円形の意匠が押されていることや、裏印には手書きで「有田製」や「野村納」と描かれているものや「2つの斧を重ね合わせたマーク」が確認でき、「広大病院」の器種と形態が一致するものは確認できない。いずれも意匠の色調は藍色であるが、口縁に施文は施されていない。意匠に

使われている文字も旧字体であることから、「広大病院」食器よりも使用時期は古いと考えられる。

京都大学では、京都市左京区にある吉田キャンパスの附属病院敷地において、大量に投棄された皿や小椀、小鉢、大椀、蓋ものなどの磁器製食器類が出土している⁽²⁾。大椀や蓋ものとする資料のなかには、「広大病院」食器の碗Ⅰや蓋Ⅰと形態が類似するものが含まれている。裏印の意匠が異なるものの、美濃窯業製のものが確認されている。ただし、京都大学で出土している美濃窯業製磁器の裏印は、登録商標となっている扇子の形をしたものである。意匠や裏印に緑色の釉薬が使用されていることや、外面口縁に二重線が描かれている点でも「広大病院」食器と共通するが、蓋の上部や三段重ね食器と思われる皿の側面に押された「醫院」の円形意匠は、九州大学で出土しているものと類似していることがうかがえる。また、1931(昭和6)年に「京都帝国大学医学部附属医院納」との記録があり、美濃窯業製食器の納入は昭和期以降のことと考察されている(伊藤 2014)。

また、徳島大学では、徳島市蔵本町に所在する医学部と附属病院のある蔵本キャンパスにおいて、碗や蓋、鉢などの病院食器が出土している(三阪 2015)。口唇部が花卉型の鉢が確認できることや、碗や蓋の形態も同型であることなど、「広大病院」食器と類似点が多く、高台内には緑色釉で同じ「MINO」印も押されている。碗の側面や蓋の上部に押された印は、「大學」の文字に渦潮を模したものかと推測される意匠である点と、口縁に意匠と同色の線が施されていない点が、「広大病院」食器と異なっているといえる。器種の形態が類似していることや、裏印が同じであることから、「広大病院」食器と納入時期が近いことが示唆される。

さらに、金沢大学では、金沢市宝町に所在する医学部附属病院のある宝町キャンパスにおいて、「金澤大學」、「金澤大学醫院」、「金澤病院賄用」、「附属醫院」などの多様な印が押された硬質陶器および磁器が出土している(金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000)。病院で使用された食器類の利用の変遷や器種構成を知る上で興味深い資料である。裏印は、「硬陶」の文字が入ったものがあり、明治41年に金沢市に設立された日本硬質陶器株式会社のものと考えられている。

以上のように、各大学から出土する病院食器を比較することで、当時の多様な大学病院食器類の使用の歴史を知ることができる。また、北海道大学や神戸大学においても病院食器が出土しており、特に昭和期において磁器製の大学病院食器利用の文化が全国に広がっていたことがうかがえる。なお、熊本大学では、熊本市京町に

ある教育学部附属小中学校において、「熊本」と手書きされたものや、「懸立」とゴム印が押された師範学校時代の磁器製食器が出土している（江頭 2008）。また、旧金沢刑務所跡からは、「監」や「刑」などの裏印が押された食器類なども出土している（金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000）。大学病院だけでなく、大学や刑務所などの集団給食用食器の生産や流通の歴史を明らかにするうえで、遺跡から出土する近現代食器は興味深い研究対象だといえる。

6. 考察

(1) 「広大病院」食器の利用時期

広島大学医学部および大学病院は、1957（昭和 32）年に呉市から現在の霞キャンパスに移転して現在に至るが、現在病院の入院食や一般の食堂で使用されている食器はすべてメラミン製のもので、陶磁器類は使用されていない。霞地区への移転以前の食器類の利用状況については、本出土資料では知ることができないが、磁器製「広大病院」食器からメラミン食器に移行された時期については、有益な情報がある。

昭和 30～40 年代に大学病院に勤務していた看護師の方からの聞き取りによると、勤務していた当時、本病院食器を入院食用の食器として使用していたこと、青は男性用、ピンクは女性と子供用であったこと、また昭和 41 年頃に病院厨房の建て替えがあり、その頃に磁器製の食器から樹脂製のものに切り替わったとのことである⁽³⁾。また、医学部職員として勤務し、昭和 37 年に退職された方の話によると、当時 11 号館（第 21 図）東側に一般に利用できる食堂があり、そこで使われていたとの話も聞くことができた。さらに、現在 60 歳前後の方が子供のころ、父親と病院に来た際に食堂で見たとの情報もあり、これを 50 年前と考えると、昭和 40 年頃ということになり、「広大病院」食器が使用されていたであろう時期と合致する。

以上のことから、「広大病院」食器は、入院食用としてだけでなく、職員やお見舞いなどで病院を訪れる一般の市民にも使われ、霞キャンパス内で広く利用されていたことがうかがえる。

(2) 「広大病院」食器の生産と利用の変遷

食器に押された「広大病院」の文字には、タイプ A とタイプ B があることを指摘したが、これらについても前述の看護師の方の記憶によると、購入時期が異なる 2 種類があり、タイプ A が古く、タイプ B が新しいとのことであった。調査において、

すべての出土資料を持ち帰っていない点や、小規模な調査範囲であることから、資料全体の特徴を示しているとは言いがたいが、タイプ A は青色のものが器種と出土量ともに最も多く、緑色のものもそれに次いで確認され、桃色についてはわずかに認められる程度である。一方、タイプ B については、桃色が器種と出土量ともに最も多く、青色も桃色の 4 分の 1 程度認められるものの、緑色は確認できない。このように、文字タイプ間で器種組成や釉薬の色に差が認められるのは、納入時期の異なる食器であることを示しているのかもしれない。

また、美濃窯業は、1949（昭和 24）年に戦後の製陶部再建を完了し、製品品質の高級化をはかることによって、集団給食用食器の全国販売を拡大し、その後も昭和 30 年代にかけて窯を増設したり、ロクロや乾燥炉などの設備を整えている（美濃窯業株式会社 2002）。昭和 30 年代に広島大学で使用された「広大病院」食器の裏印の意匠の一致や、各器種の形態の類似性から、徳島大学病院にも同じ頃商品を納めていた可能性が高い。また、美濃窯業製品が、九州大学を含めた複数の大学病院で使用されていたことは、美濃窯業製品の営業努力や製品の品質の高さを示しているのであろうか。

7. まとめ

以上、「広大病院」食器の器種分類や判印の特徴などから、美濃窯業製品であることや銘および裏印の形態が複数あることが明らかになった。また、貴重な聞き取り情報から、「広大病院」食器が、入院患者用の食器としてだけでなく、大学病院の食堂でも利用されていたこと、また、2 度の納入時期があることや、昭和 41 年頃まで磁器製の食器が利用されていたなどの使用時期についても明らかにすることができた。

なお、本稿作成において、他大学出土の病院食器の実見を行っていないため、近代食器の詳細な製作技法の特徴などについての考察が不十分であるが、今後資料調査を進め、全国的な近代食器の流通や製作技法などについて稿を改めることで追究していきたい。また、「広大病院」食器以外に、口縁部に緑の二重線が巡るが、高台内に「MINO」印が認められないもの（第 25 図 28）や、別の裏印が押された磁器も多く存在することから、それらの生産元や病院食器との関係などについても今後考察を深めたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、徳島大学埋蔵文化財調査室の端野晋平氏と三阪一徳氏には、美濃窯業に係る有益なご教示を賜った。また、「広大病院」食器が使われていた当時の様子について、多くの方々から情報や聞き取りの記録を提供いただいた。記して感謝申し上げる次第である。

注

- (1) 各調査地点で、碗に限らず、すべての器種で、出土したすべての資料を採集できているわけではなく、選択的に持ち帰った調査地点の資料も存在する。また、破片のため、器種分類が確実でない「碗Ⅰか」「鉢Ⅰか」なども、それぞれ「碗Ⅰ」や「鉢Ⅰ」の点数に加えて資料点数としている。
- (2) 他大学出土病院食器の器種分類の名称については、各報告書の記載に従った。
- (3) 看護師の方への聞き取りは、2008年、藤野次史氏が行った。調査時のその他の情報は、藤野と永田千織氏により提供を受けた。

参考文献

- 金沢大学埋蔵文化財調査センター編 2000『金沢大学文化財研究』2
九州大学総合研究博物館 2014『福岡ミュージアムウィーク 2014 参加企画 特別展示 九大特注白磁の謎 うつわと九大』（展示チラシ）
伊藤淳史 2014「京都大学病院構内 AH15 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011・2012 年度』
京都大学文化財総合研究センター編
江頭俊介 2008「教育学部附属小中学校校舎等改修機械設備工事に伴う発掘調査（0721 調査地点）」『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』V、熊本大学埋蔵文化財調査室
三阪一徳 2015「立会調査の概要」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』1、徳島大学埋蔵文化財調査室編
美濃窯業株式会社編 2002『美濃窯業社史』

Porcelain with “Hirodai Byoin” mark excavated from the Kasumi Campus of Hiroshima University

Eriko Ishimaru, Miho Ochika, Yuko Nishiguchi

A lot of porcelain tableware stamped "Hirodai Byoin" mark was excavated from the Kasumi Campus of Hiroshima University. There is a kind of plural in tableware a bowl, a lid, a pot and a dish. "Hirodai Byoin" is pushed towards tableware respectively by blue, pink and green glaze, and a single line or a double line is drawn on the edge with the same color.

The design of the "MINO" mark entered the bottom, and these tableware understood that it was porcelain produced in Mino Ceramic Co., Ltd. It became clear that these tableware was used in a Showa period for a dining room use and the inpatients of the Hiroshima University Hospital. These ceramic ware clarify the history and the culture of the university hospital, the production district of ceramics and the circulation of the Showa period.

第1表 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器観察一覧

NO.	調査番号*	出土地点	器種分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	摘み径 (cm)	重量 (g)	印判	文字 施文 色調	施文
1	KA0806	掘方	碗 I	14.6	5.6	7.0		408.6	広大病院A	青	外面口縁二重線
2	KA0710	NO.23溝埋土	碗 I	14.6	5.4	7.0		325.0	広大病院A	桃	外面口縁一重線
3	KA0710	NO.23	碗 I	15.0	5.6	6.9		287.3	広大病院A	緑	外面口縁二重線
4	KA0710	NO.23	碗 I	14.8	5.6	7.0		67.4	広大病院B	青	外面口縁二重線
5	KA0710	No.23	碗 I	—	—	7.1		109.6	広大病院B	青	外面口縁二重線
6	KA0710	No.23溝掘方	碗 I	—	—	7.1		130.9	—	青	外面口縁二重線
7	KA0710	NO.23	碗 I	15.5	—	—		40.7	広大病院B	桃	外面口縁一重線
8	KA0710	NO.23溝埋土	蓋 I	13.2		4.0	5.4	91.9	広大病院A	青	外面口縁二重線
9	KA0710	NO.23掘方	蓋 I	12.8		3.9	5.6	105.5	広大病院A	緑	外面口縁二重線
10	KA0710	NO.23	蓋 I	13.2		4.0	5.4	126.7	広大病院B	青	外面口縁二重線
11	KA0710	NO.23溝埋土	蓋 I	13.0		4.0	5.6	157.8	広大病院B	桃	外面口縁一重線
12	KA0710	NO.23掘方	蓋 I	13.2		4.0	5.6	83.5	広大病院B	桃	外面口縁一重線
13	KA0710	NO.23掘方	蓋 I	13.0		4.0	5.6	217.3	広大病院B	桃	外面口縁一重線
14	KA0806	掘方	鉢 I	11.0	4.9	5.0		175.7	広大病院A	青	外面口縁二重線
15	KA0710	NO.23	鉢 I	11.1	—	5.0		45.1	広大病院B	桃	外面口縁一重線
16	KA0710	NO.23溝埋土	鉢 I	11.0	5.1	5.0		168.5	広大病院B	桃	外面口縁一重線
17	KA0710	NO.23	鉢 I	—	—	—		8.3	広大病院B	桃	外面口縁二重線
18	KA0710	NO.20	鉢 II	11.8	—	—		32.7	—	青	外面口縁二重線
19	KA0710	NO.23溝埋土	鉢 II	11.9	—	—		52.1	広大病院B	桃	外面口縁一重線
20	KA0710	NO.23掘方	鉢 II	12.2	5.4	7.0		321.4	—	桃	外面口縁一重線
21	KA0710	NO.23	鉢 III	12.5	7.2	6.3		298.2	広大病院A	青	外面口縁二重線
22	KA0806	掘方	鉢 III	12.4	7.2	6.1		181.6	広大病院A	青	外面口縁二重線
23	KA0710	NO.23掘方	鉢 III	12.5	7.2	6.3		336.0	広大病院A	青	外面口縁二重線
24	KA0710	NO.23	蓋 II	11.0		2.8	4.6	38.8	広大病院A	青	外面口縁二重線
25	KA0710	NO.23	蓋 II	11.2		残1.7	—	14.6	広大病院A	桃	外面口縁一重線
26	KA0710	NO.23掘方	蓋 III	13.0	—	—		12.3	—	桃	外面口縁一重線
27	KA0710	NO.23溝埋土	湯呑 I	7.0	—	残7.4		39.9	広大病院A	青	外面口縁二重線
28	MI1201	SK2	湯呑 II	8.1	3.2	4.6		105.7	なし	緑	外面口縁二重線
29	KA0710	NO.22溝埋土	碗 II	11.0	4.8	5.7		102.8	—	緑	外面口縁二重線
30	KA1202	雨水配水管敷 設排土	皿 I	17.4	10.2	3.3		190.3	広大病院A	青	内面口縁二重線
31	KA0710	NO.23掘方	皿 I	—	10.0	—		112.7	広大病院B	桃	—
32	KA0710	NO.21溝上層	皿 I	17.3	10.0	3.4		99.9	—	桃	内面口縁一重線
33	KA0710	NO.23溝埋土	皿 II	15.2	8.8	2.9		128.5	なし	緑	内面口縁二重線
34	KA0710	NO.23溝埋土	小皿	9.4	5.5	1.9		68.1	広大病院A	青	内面口縁二重線
35	KA0710	NO.21溝埋土	小皿	—	—	—		8.5	広大病院A	桃	内面口縁一重線
36	KA0710	NO.23掘方	小皿	9.4	5.4	1.9		41.0	広大病院A	緑	内面口縁二重線
37	KA0710	NO.23溝埋土	小皿	9.4	5.6	1.9		74.1	広大病院B	青	内面口縁二重線
38	KA0710	NO.23溝埋土	小皿	9.3	5.2	1.8		24.5	広大病院B	桃	内面口縁一重線
39	KA0710	NO.20	小皿	9.3	5.2	1.8		32.5	広大病院B	桃	内面口縁一重線

* 調査番号は第20・21図の記号及び調査名と一致する。

* 印判:A…縦長のもの、B…幅広のもの

* 裏印:①…縦横比0.6×1.0cm、②…縦横比0.6~0.7×1.1~1.2cm

裏印 (窯印)	裏印 色調	裏印位置	釉	残存率	個体 数	その他観察事項	実測 図	写真 図版
MINO	緑	正 中央	透明	ほぼ完形	1	蓋付飯茶碗。畳付無釉。裏印①	第22図-1	図版1-1, 図版3-1
MINO	緑	正 右寄り	透明	2/3	1	線の中央が薄い。裏印①	第22図-2	図版2-2
MINO	緑	正 中央	透明	2/3	1	畳付無釉。裏印①	第22図-3	図版3-3
—	—	—	透明	1/4	1	畳付無釉。	第22図-4	図版1-4
—	—	—	透明	1/4	1	畳付無釉。		図版1-5
—	—	—	透明	1/3	1	畳付無釉。		図版1-6
—	—	—	透明	破片	1		第22図-7	図版2-7
なし			透明	1/2	1	飯茶碗の蓋。摘み上部無釉。	第23図-8	図版1-8
なし			透明	2/3	1	摘み上部無釉。口唇a。裏印 ②	第23図-9	図版3-9
なし			透明	3/4	1	摘み上部無釉。	第23図-10	図版1-10
なし			透明	2/3	1	畳付無釉。重量には樹脂分含 む。	第23図-11	
なし			透明	1/2	1	摘み上部無釉。	第23図-12	図版2-12
なし			透明	ほぼ完形	1	畳付無釉。		図版2-13
MINO	緑	正 右寄り	透明	ほぼ完形	1	五弁花形。畳付無釉。歪み。裏 印①	第24図-14	図版1-14, 図版3-14
—	—	—	透明	1/4	1	畳付無釉。五弁花形。	第24図-15	
MINO	緑	正 左上寄り	透明	ほぼ完形	1	畳付無釉。重量には石膏分も含 む。五弁花形。裏印②	第24図-16	図版2-16 図版3-16
—	—	—	透明	破片	1	五弁花形。	第24図-17	図版2-17
—	—	—	透明	破片	1		第24図-18	図版1-18
—	—	—	透明	1/4	1	畳付無釉。	第24図-19	図版2-19
MINO	緑	正? 中央	透明	1/3	1	畳付無釉。重量には石膏分も含 む。裏印②	第24図-20	図版2-20, 図版3-20
—	—	—	透明	2/3	1	畳付無釉。重量には石膏分も含 む。	第25図-21	図版1-21
—	—	—	透明	1/2	1	畳付無釉。	第25図-22	
MINO	緑	正 上寄り	透明	3/4	1	重量には石膏分も含む。裏印①		図版3-23
なし			透明	1/4	1	摘み上部無釉。身は器種不明。	第25図-24	図版1-24
—	—	—	透明	破片	1		第25図-25	図版2-25
—	—	—	透明	破片	1	返しあり。	第25図-26	図版2-26
—	—	—	透明	1/4	1		第25図-27	図版1-27
なし			透明	完形	1	畳付一部釉あり。	第25図-28	
MINOか	緑	—	透明	1/2	1	畳付無釉。裏印菱形二重?	第25図-29	
MINO	緑	正 中央	透明	1/2	1	畳付無釉。裏印①	第26図-30	図版1-30, 図版3-30
MINOか	緑	正 中央	透明	1/4	1	畳付無釉。	第26図-31	図版2-31
—	—	—	透明	1/4	1	畳付無釉。	第26図-32	図版2-32
MINO		中央	透明	1/2	1	畳付無釉。裏印②	第26図-33	図版3-33
MINO 33.20.	緑	正 中央	透明	ほぼ完形	1	畳付無釉。重量には石膏分も含 む。裏印①	第27図-34	図版3-34
—	—	—	透明	破片	1	畳付無釉。		図版2-35
MINO	緑	正 右上がり	透明	1/2	1	畳付無釉。裏印②	第27図-36	図版3-36
MINO	緑	正 中央	透明	ほぼ完形	1	畳付無釉。裏印②	第27図-37	図版1-37, 図版3-37
MINO	緑	逆 中央	透明	1/4	1	畳付無釉。裏印②	第27図-38	図版2-38
—	—	—	透明	1/3	1	畳付無釉。		図版2-39

図版1 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器 (1)



青色釉：「広大病院」文字タイプ A



青色釉：「広大病院」文字タイプ B

図版2 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器(2)



桃色釉：「広大病院」文字タイプA



桃色釉：「広大病院」文字タイプB

図版3 広島大学霞キャンパス出土「広大病院」食器 (3)



緑色釉：「広大病院」文字タイプ A



裏印：「MINO」